

# 2017 年度FD活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会  
委員長（学長） 秋岡 陽  
副委員長（教務部長） 竹内 正彦

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2017 年度は、「高大接続」「学修成果の把握」及び「PBL 科目」に関する学びのために、学外講師を招いて年 3 回の講演会を行いました。

一方、学内で 2015 年度から例年実施している本学の強みである語学教育の更なる発展を狙いとした「外国語による教授法プロジェクト」では、『音楽教育における外国語による授業展開』と題し、音楽学部から「外国語で授業をしてみたら」という視点でのプレゼンテーションを受けて、全学で学ぶ機会を持ちました。

また、学修行動調査も例年通り実施し、学生の学修行動の実態、変化を把握しました。

## 目次

1. 外国語による教授法プロジェクト③	1
2. 大学 FD 講演会 報告	
第 1 回 現在の高校生・女子生徒の学びの習慣、学習経歴について知る	4
第 2 回 学修成果の把握	14
第 3 回 PBL 科目の実践と課題	20
3. 学修行動調査	28
4. 教育の質向上に向けた取り組み	28
カリキュラムマップの見直し	
シラバス改善	
5. 2017 年度活動内容	29

日時:2017年7月26日(水)17:00~18:15  
 会場:緑園キャンパス CLA 棟 3階 2305教室  
 題目:音楽教育における外国語による授業展開の可能性について考える  
 ~外国語で授業をしてみたなら~

#### プログラム

17:00~17:15 発題者①川本 聡胤 先生(音楽芸術学科准教授)  
 × 星野 聡先生(音楽学部教務主任)  
 17:15~17:30 発題者②堀 由紀子 先生(音楽学部演奏学科教授)  
 17:30~18:15 ラウンドテーブル(質疑応答・意見交換・ディスカッション)

\*川本 聡胤 先生(専門:ポピュラー音楽、音楽理論、音楽学)  
 星野 聡 先生(専門:声楽、指揮、オペラ、ミュージカル、舞台製作、合唱)  
 堀 由紀子 先生(専門:ピアノ演奏)

挨拶:秋岡 陽 学長(大学FD委員会委員長)

司会:竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学教授)

対象者:専任教職員

出席者:教員 12名(英文3、日文0、コミュ0、国際1、音楽3、演奏5)

職員 12名

#### 講演会チラシ

日時:2017年7月26日(水) 17:00~18:15  
 会場:CLA棟 3階 2305教室 対象者:専任教職員

発題者①川本 聡胤 先生(音楽芸術学科准教授)  
 × 星野 聡先生(音楽学部教務主任)

発題者②堀 由紀子 先生(音楽学部演奏学科教授)

ラウンドテーブル(質疑応答・意見交換・ディスカッション)

主催:川本 聡胤 先生(音楽芸術学科准教授)、星野 聡先生(音楽学部教務主任)

発題者①川本 聡胤 先生(音楽芸術学科准教授) × 星野 聡先生(音楽学部教務主任)  
 発題者②堀 由紀子 先生(音楽学部演奏学科教授)

ラウンドテーブル(質疑応答・意見交換・ディスカッション)

対象者:専任教職員

会場:CLA棟 3階 2305教室

主催:川本 聡胤 先生(音楽芸術学科准教授)、星野 聡先生(音楽学部教務主任)

発題者①川本 聡胤 先生(音楽芸術学科准教授) × 星野 聡先生(音楽学部教務主任)  
 発題者②堀 由紀子 先生(音楽学部演奏学科教授)

ラウンドテーブル(質疑応答・意見交換・ディスカッション)

対象者:専任教職員

会場:CLA棟 3階 2305教室

### 発題1: 川本 聡胤 先生「外国語による音楽指導の可能性」

#### I 経験を踏まえて

今回のワークショップを行うにあたり、ノース・キャロライナ大学(アメリカ)留学中に TA として現地学生に対して英語で指導した経験と自らが英語で学んだ経験に基づき、日本人学生にとっての英語で専門科目を学ぶうえで必要なことや学んだことで得られること、またこれらのフェリスでの可能性を考えてみた。

自身の経験としては、英語話者の思考法に直面し、ディスカッションの場でアウトプットを積極的に行う必要があることを痛感したが、この経験がその後国際的な学会発表の場でのプレゼンテーションや質疑応答への対応で役に立った。また、専門用語の習得にも非常に役に立った。

#### II フェリスでの英語指導の可能性

グローバル化の進む社会において、英語でのコミュニケーション能力はますます必要とされてきている。また、卒業後に海外で音楽活動を継続する状況のみならず、日本国内においても海外からのミュージシャンや研究者、ライターなどと仕事をする機会の増加が想定される。このために、音楽芸術学科においても専門科目を英語で展開することの意義はあると思う。

展開方法としては、英語での専門用語の習得を目的として「音楽基礎理論」「和声」「西洋音楽通史」などの授業で一部英語を用いて行うことが考えられる。また、例えば「音楽社会学」において、音楽関係の文章を英語で執筆する能力を養うことが考えられるのではないかと。

## 発題2: 堀 由紀子先生:

### I 経験を踏まえて

今回のワークショップを行うにあたり、まず、「外国語で専門科目を学ぶ」ことの目的について考えてみた。

「言語」というものはただ「言葉」であるだけでなく、そのなかに「それぞれの価値観」や「メンタリティ」を内包しており、そういった全体を理解することが異文化コミュニケーションには非常に大切である。

自身もドイツに留学した際に、「日本語」と「ドイツ語」の成り立ちの違い、そこに内包される「価値観」の違いから、自分の「価値観」へ大きな影響を受けた。また、自身が興味のある作曲家の多くがドイツ語を話す人であったことから、自身の演奏研究を深める上での作品理解のために、ドイツ語を学ぶことが必要であることを痛感した。

こうした経験から、演奏学科の専門科目と「外国語」を結び付けて学ぶことの意義はあるのではないかと考えるに至った。

### II フェリスにおける外国語による指導の可能性

演奏学科の専門科目をドイツ語で行うことで得られる教育効果について考えてみた。なお、初習外国語であるため、あくまで対象とする学生はインテンシブ・コース受講生を対象とすることを前提とする。

ドイツ語を用いて授業を実施することは「ドイツに根差した芸術を理解する」ことにつながり、「ドイツ語」の言葉だけでなく、使われ方・背景を理解することでドイツで生まれた音楽そのものを理解すること手助けとなる。

実際に授業でどのように展開するかという点では、「音楽理論」関係の授業に一部ドイツ語を用いることで、ドイツ語での専門用語を学び、日本語では得られないその用語が持つ概念までを包括的に学ぶことができる。手法としては、日本語で学んだ内容の復習をドイツ語で行う、という補完的な展開であれば、理解が深まり効果が高まる可能性が考えられる。個人レッスンであれば、留学を希望している学生に個々に対応していくことも可能である。

また、「作曲家の自伝や手紙を原語で読む」というような内容であれば、文学部・国際交流学部の先生方とのコラボレーションの授業なども可能性があると思う。

### ラウンドテーブル

#### (1) 音楽学部における可能性

外国語を用いることで専門科目の理解がより深くなる可能性・効用がある。

#### (2) 専門科目としての展開

専門性の高いレッスンを行うには、「外国語」を用いる必要性が必ずしもなく、また、「外国語を学ぶ」ではなく「外国語で学ぶ」、特に一部ではなく授業全てを「外国語」で展開することは非常に難しい現状がある。

#### (3) 学生への動機づけ

外国語で学ぶことで学生にとってプラスになることを提示する必要がある。

#### (4) 他学部との違い

他学部では言語がコミュニケーションのツールとして必要だが、音楽学部ではツールだけではなく、音楽の専門性を学ぶことに密接につながる部分がある。

### アンケートから

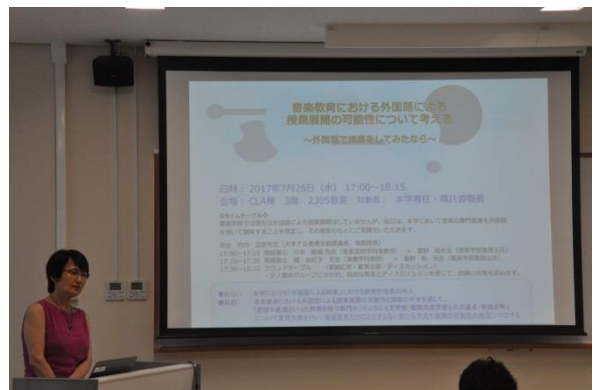
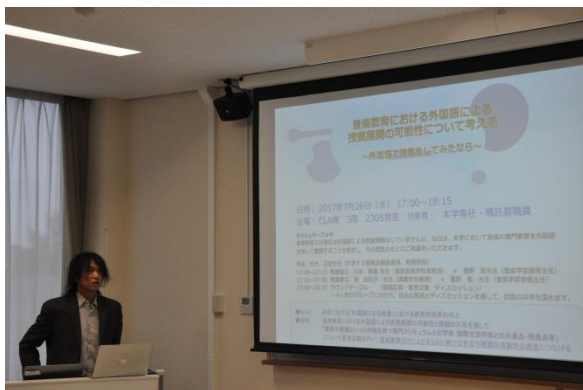
- ・「外国語による教授法」をフェリスの音楽学部で行う場合、具体的にどの授業で展開ができそうで、学生にはどのようなメリット・デメリットが生じるか等イメージが深まった。
- ・「価値観の違い」に気付く(=異文化交流)は、語学教育の重要な産物だと思う。
- ・音楽と異なる領域の分野(文や国)とのコラボも可能なのでは、と言う点も共感できます。
- ・音楽の文法を学ぶために、例えばドイツ語で、音楽理論を学ぶ(外国語で復習するように学ぶ)のは大切。
- ・音楽家が言語・語学教育をどういうふうにとらえているのか理解を少しなりとも深めることができました。

- ・外国語教育の有効性についても様々な意見を聞くことができ、有益でした。
- ・英文学と音楽芸術のコラボ授業が以前あった。そのような授業を外国語で行うというアイディアは興味深い。
- ・音楽用語を含む講義の実用化は教員自身の語学能力のスキルを上げることが重要と再認識した。専門性の強い個人レッスンの英語、独語、仏語、伊語での展開は可能と感ずる。留学を希望する学生には特に必要だろう。
- ・音声、音、言葉を大切にする点が音楽におけるユニークな部分なので、語学教育とより相乗効果があるのではと感じた。
- ・音楽学部における外国語による授業について、具体的にどのような展開の可能性があるかを知ることができた。専門用語を学ぶ、音楽理論を学ぶ、という点については、展開方法によっては、学生にとって非常に有益なのではないかと思う。外国語と専門科目の密接なつながりを感じた。
- ・語学についての動機づけについてドイツの私の先生が季節ごとにある行事の歌や踊りを教えてくださり、文化を学ぶと共にドイツ語のフレーズを覚えました。音と関連した語学に興味があります。
- ・初習外国語担当として語学の学修と専門科目の学修の密接さを実感できる機会となりました。先生方の学生時代のご体験や、学生を指導されるなかで形成された考えに触れることができ、今後のカリキュラム(語学)について関係の先生方とともに考えていく上でのヒントとなったと感じています。
- ・外国語をダイレクトに全部展開できて専門用語を言語からスタートし、難しいところは日本語でという案に共感した。
- ・芸術分野を深く掘り下げて学修する際の語学の重要性を理解することができました。また、音楽と文・国とのコラボ授業というアイディアもとても新鮮でした。

#### ワークショップの様子

発題者①川本聡胤先生×星野聡先生

発題者②堀 由紀子先生



竹内教務部長まとめ

ラウンドテーブル





2-1

## 第1回FD講演会 現在の高校生・女子生徒の学びの習慣、学習経歴について知る

日時:2017年7月5日(水)17:00~19:00

会場:緑園キャンパス 2404 教室

プログラム

第1部 基調講演

第2部 本学の導入教育について(本学各学部長)・質疑応答

講師:大坪 邦久(東京女子学園中学校・高等学校 学修指導部長)

司会:竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学科教授)

対象者:専任教職員

出席者:学長、教務部長、教員16名(英文6、日文2、コミュ1、国際3、音芸3、演奏0、情セ1)

職員22名

### 講演会チラシ

2017年度第1回フェリス学院大学FD講演会

## 現在の高校生・女子生徒の 学びの習慣、 学習経歴について知る

●プログラム

日程	2017年7月5日(水)	
会場	CLA棟 2404教室	
対象者	本学専任・嘱託教職員	
第1部	17:00~17:50	基調講演 大坪 邦久 先生
第2部	17:50~18:10	本学の導入教育について 本学各学部長
	18:10~18:20	質疑応答
	18:30~19:00	意見交換会(茶話会) *会場:2301教室

第1部 基調講演  
次の3点をポイントに、英語教育や21世紀型授業・教育、高大接続改革に伴う受験体制の変化など、高校教育の「現在」を交えてご講演いただきます。

- ① 高校生の学習経歴、学びの習慣
- ② 高校生が考えている「学ぶことの意味・喜び」
- ③ 高校生在入学前に身につける基礎学力の裏面

▶ 第2部 本学の導入教育について  
本学各学部長から、今年度前学期の授業参観の結果を踏まえ、本学の導入教育についてお話いただきます。

<講師紹介>  
**大坪 邦久(おおつね くにひき) 先生**  
東京女子学園中学校・高等学校 学修指導部長、担当教科:理科・生物

1974年 東京農業大学農芸化学科卒業  
1974年 東京農業大学第一高等学校講師、駒沢女子学園中学校・高等学校講師  
1979年 東京女子学園中学校・高等学校教諭、現在に在る  
2007年 NITE(高校教育「生熟」実証)収録期間(6年)  
1974年より、日本自然観察部研究会会員  
東京都野洲山自然会『アダムラ山の会』代表  
1981年4月 カワコム選考、デザイン補選任職

### 基調講演

大坪 邦久 (東京女子学園中学校・高等学校、学修指導部長)

#### 1. 私立女子中学・女子高等学校の現状

生徒が集まる学校と集まらない学校の二極化が進んでおり、中堅の女子中学校、高等学校は生徒集めに苦慮している。生き残りをかけて、どうしたら生徒が集まるか、ということを経営者の女子校の教員が集まって考える場を継続的に持ってきた。ただし、生徒が集まるようになった学校の教員が次々に抜けていく状況がある。また、共学化もどんどん進んでいる。そんななか、各女子高は次のとおりさまざまな取り組みを実施している。

- 生徒の満足度を上げる
- 21世紀型教育方向への転換
- 学習指導要領の改訂(2020年大学入試改革の対策)
- 次世代に通用する英語力をもった生徒の育成
- 自分の人生設計達成のためのキャリア教育

○上位難関大学への合格数を増やす

## 2. 東京女子学園の教育プログラム

これらのこと、また「ブルームのタキソノミー」、「新しいが学力」、「国際バカロレアの学習者像」、実際の生徒たちの現状を踏まえて東京女子学園では新しい時代に必要な能力を身に付けるための教育プログラムを悩みながら試行錯誤しながら組み立ててきた。

新しい時代に必要な能力を次のとおりと考え、生きる力＝智慧を身に付けさせる教育プログラムを「地球思考」を展開している。

### 【新しい時代に必要な能力】

知識、技能、思考力、判断力。表現力

主体性、多様性、協調性

新たな価値観を創造する力、社会で自立的に活躍する力



12


また、各学校では、現在「思考コード表」（下記参照）というものをそれぞれ持っており、これは授業がどのちからのどの段階のものを身に付けるものかを指し示すもの。進学塾でもこの「思考コード表」を用いて、どの学校に入るにはどういったちからがどの程度のレベルで必要かを説明する時代になっている。

中学1年生に「思考コード表」を提示しても、はじめはよくわかっていないが、授業の中で利用することによって少しずつ理解していく。事例としては、「アイスクリームを作る」というアクティブ・ラーニングを行った授業が挙げられる。この授業では、生徒たちが思考コードに基づいて、何をすればレベルが上がるかを考え、アイスクリームのCMを制作し発信する、というところまで取り組みを行っていた。


また、生徒にもうひとつ必要なことは「思考コード表」に基づいた「ルーブリック表」。「思考コード表」に基づき、どのように評価を行うかを生徒と教員が共有する必要がある。生徒が今日の授業でどの程度何ができたのかを自覚できるようにしていく、ということがこれから必要とされており、これらが学外へと情報公開される時代になっている。

最大の現在の悩みは、大学入試改革への対応であり、大学がどのように高校生のちからを測るようになるのかという点である。大学の説明会に参加して情報収集をしているが、各大学ばらばらであり受験対策については現在の大きな関心事である。

【思考コード表】

東京女子学園思考コード		地球思考 世界とつながる女性へ	
地球共生	C1 共有された知識を普遍化する	C2 知識ネットワークを再編、拡大する	C3 智慧 <b>実</b>
協働	B1 知識を共有する	B2 共有した知識を整理、分析、統合する <b>花</b>	B3 共有した知識を再統合する
自立	A1 知識を得る <b>蕾</b>	A2 知識を整理、分析、統合する	A3 知識を再統合する
<b>梅</b> 	知識理解	論理的思考	批判的思考 創造的思考

【アイスクリームをつくるアクティブ・ラーニングにおける思考コードの活用】

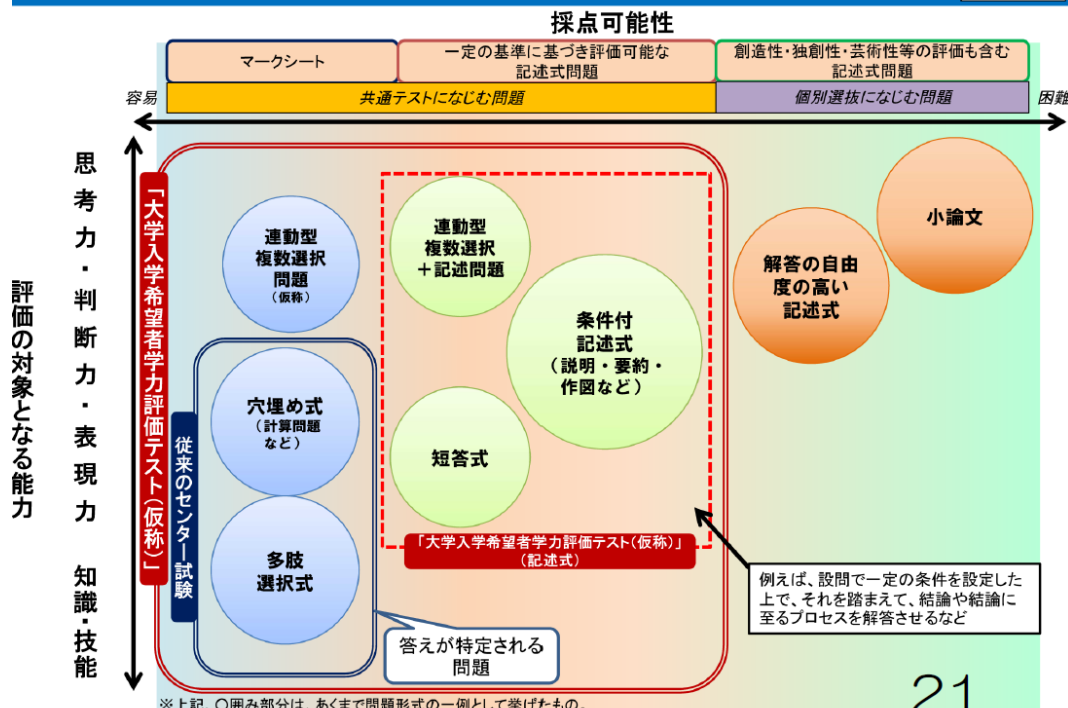
思考コード		地球思考・世界とつながる女性へ	
地球共生	C1 共有された知識を普遍化する	C2 知識ネットワークを再編、拡大する	ポスターを貼り、CMを実演・上映 マーケティング SNSで発信・販売
協働	B1 知識を共有する	人気アイスの理由 レシピの研究 成分・原価の比較 CMやポスターの比較・分析	アイスの決定 ポスター作成 CMの作成 アイスの調理 試食
自立	A1 <授業> アイスの歴史、成分・原価計算	A2 知識を整理、分析、統合する	知識を再統合する
<b>梅</b> 	知識理解	論理的思考	批判的思考 創造的思考

【英語の授業のルーブリック例】

Teacher Name: _____		Student Name: _____		
CATEGORY	A	B	C	F
Preparedness (Memorization)	Student is completely prepared and has obviously rehearsed.	Student seems pretty prepared but might have needed a couple more rehearsals.	The student is somewhat prepared, but it is clear that rehearsal was lacking.	Student does not seem at all prepared to present.
準備	しっかりと暗記しリハーサルも行った	暗記はしていたが、後2〜3回リハーサルが必要だった。	暗記はしていたが、リハーサルはしていない。	全く準備をせずに発表に臨んだ
Content	Shows a full understanding of the topic.	Shows a good understanding of the topic.	Shows a good understanding of parts of the topic.	Does not seem to understand the topic very well.
内容	トピックを十分に理解していた。	トピックを理解していた。	トピックの一部は理解していた。	トピックをよく理解していなかった。
Speaks Clearly	Speaks clearly and distinctly all (100-95%) the time, and mispronounces no words.	Speaks clearly and distinctly all (100-95%) the time, but mispronounces one word.	Speaks clearly and distinctly most (94-85%) of the time. Mispronounces no more than one word.	Often mumbles or can not be understood OR mispronounces more than one word.
話し方の明瞭さ	100%-95,明瞭に話していた。発音のミスはなし。	100%-95,明瞭に話していた。発音のミスは一つ	94%-85%,明瞭に話していた。発音のミスは2語以上	しばしば口ごもり、聞き取れなかった。発音のミスは2語以上。

【大学入試改革に伴う評価方法のイメージ例】

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」とそれらを評価する方法のイメージ例（たたき台） 別紙2-①





こういった社会の動きの背景も受けて、東京女子学園では「朝朗読」という朝のホームルーム（15分中の5分）を利用して読解力をつける試みを開始した。中学1年生で自分に言いたいことを400字で書けるように、高校3年生では2000字の文章を書けるようになることを目標に行っている取り組みで、具体的には中学では新聞記事を読み、大切なところに線をひくところから始め、記事の要約をするというもの。中学3年生以降は題名や副題も考えて要約をし、高校2年生以降は題名を付け、高校3年生では「自分の夢」「夢への挑戦」「志望理由」などを書く、という指導をしている。

「朝朗読」を始めてから、生徒たちが文章を書くのが早くなってきている。一部であるが、文章を書くことの上達が見られてきている。

また、2017年度からICTの力を身に付けさせるために生徒全員にiPadを配布し、全教科において利用し双方向の授業の展開を目標としている。具体的には次のようなことに利用している。

- ・資料集め、動画、問題集としての利用
- ・課題楽手、予習、復習、調べ学習
- ・プレゼンテーション時に使用
- ・成績管理、模擬試験の統計、大学入試
- ・英検、漢検、TOEIC、模擬試験
- ・教員と生徒・保護者間、部活動や海外研修に関する連絡事項

iPadを利用することで、正解率や家での勉強の取り組み状況の把握も可能となっている。

英語力の向上については、東京女子学園のオリジナル教科書を作成、使用している。内容は日本や世界の様々なトピックや意見を書き込みながら学び自分で作る会話集のテキストになっている。iPsdを利用してワードビンゴゲームを行い、単語をゲーム感覚手身に付けさせることも行っており、ワードビンゴ3年間で1500語を身に付け、英検準2級取得を目標として掲げている。英検対策・TOEIC講座も実施しており、高校1年生の90%が受講している。目標はTOEICを高校2・3年生で600～900点台としている。その他、次のようなプログラムを用意して実施している。

#### ・海外研修 セブ島

中学3年～高校2年生対象、期間は春休みの2週間。マンツー・マンでの英語オンリーの授業。

#### ・海外研修 アメリカ（シアトル）

高校1年生を対象とした夏休み3週間で行う1家族1人ホームステイのプログラム。午前中は英語の授業があり、午後はアクティビティがある。

#### ・海外研修 オーストラリア

高校1・2年生を対象とした1～3月の3か月間オーストラリアの名門高校で学ぶプログラム。

最後にキャリア教育についても紹介する。東京女子学戦では中学から6年間をかけて「将来のキャリアを考えていく力を育む」「子供たちが生きていく時代に必要な能力を育む」ことを目標にキャリア教育を実施している。具体的に段階的に次のとおりの教育を実施している。

中学1年生 環境問題

中学2年生 福祉とボランティア

中学3年生 職業調べ

高校1年生 ライフ・プランの作成：コミュニケーションスキルを高める。職業観、勤労観への理解を深める。

高校2年生 社会性を身に着ける：価値観を知り、将来像へとつなげる。自分の役割を確認し仕事と生活のバランスを考える。

高校3年生 卒業後の進路に向けた準備をする：自分の将来と実現にむけた計画を立案する

どの大学に進学するか、ではなく、自分が何をしたいのか、どのようになりたいのか、を重視して伝えている。生徒が自分のちからをチェックするための表も作成している。



その他の取り組み事例の紹介。

○講義

塾講師のプロ講師による補講での熱血指導

○演習

能動的学習習慣の確立を目的として、復習や暗記事項の定着などの自学習まで学校内で完結させ、講師と教員、卒業生が弱点補強や質問に即時対応する体制をひいている。

○トータルケア

### 3. 高校生が考える「学ぶことの意義・喜び」

高校生にとっての「学ぶことの意義・喜び」は次のとおりだと考える。

○自分の人生設計を考え、当面の目標を定め実行に移す。

○自学習の習慣に耐え、目標の途中地点といえる大学受験に向けて積み重ねる日々があり、目標を達成したとき得られる喜びは、高校生にとっての意味ある喜びである。

頑張れたことがご褒美、として生徒には将来、自分の子どもに、「お母さんも夢の実現にむかって頑張れたのだから、あなたもやればできる」と言えることが、頑張ったことのご褒美である、と伝えている。成功体験の積み重ねをいかにさせられるか、が鍵であると考ええる。

## 本学における導入教育

2017年度前期の授業参観は本講演会も踏まえ「初年次教育」科目を対象として実施し、その参観結果も踏まえて、各学部から本学の初年次教育について紹介を行った。

### 1. 文学部

文学部長 井上 恵美子

本日のお話、とても興味深くうかがいました。学習指導要領の改訂に伴って、具体的にどのように教育プログラムを展開しているのかよくわかった。

文学部の初年次教育は、1年次前期には「R&R(入門ゼミ)」、後期には「基礎ゼミ」という科目を設けている。「R&R(入門ゼミ)」では、「大学の学問研究への導入」というよりは、高校からどのように大学の学びにつなげるか、という点に焦点をあて、発表の仕方などの教育を行ってきた。図書館の活用方法やパソコン操作ができるようになるための教育、カルト宗教や悪質商法への勧誘等への対応も含めた危機管理も含めた授業を実施している。「基礎ゼミ」では各教員の専門分野のさわりの部分を伝えることをしているが、どの程度のこと展開できているかは検証が必要だと感じている。

授業参観では「R&R(入門ゼミ)」1科目を参観した。自分で調べて発表するという何でもよいので「4コマ漫画」を用いて、できるだけ調べて、みんなの前で発表する、その中で文学的な観点をいれていくという授業が展開されており、学生も教員も頑張っている様子が見ることができた。

これだけ高校時代に学びをしてきているのであれば、その基準を前提として大学での初年次教育を実施する必要性を感じた。

### 2. 国際交流学部

国際交流学部長 木曾 順子

国際交流学部では、1年次前期の「導入演習」において初年次教育を実施している。テキストは数年前まで「大学生 学びのハンドブック」を利用していたが、現在は「アカデミック・スキルズ」というテキストを利用している。

テキストには学ぶための技術、大学での学びとは何か、が書かれているが、大学に入学してすぐの学生にとってはあまり「そうはいつでもなんとなくよくわからない」という内容でもある。その他、資料の探し方、参考文献のあげ方などが丁寧に書かれているテキストである。

教えている側として感じるのは、自分が1年生のときに「導入演習」を担当していた学生を2年生でも

教えたときに、教えたはずのことについて「初めて聞く」ような顔をされることがあり、必要性を感じて学んでもらうことの難しさを感じている。

授業参観については、初年次教育の科目、4科目を参観した杉之原先生から感想をお話いただく。

国際交流学部教授 杉之原 真子

自分自身でも「導入演習」を担当して3年目であるが、これでよいのか、という迷いが多かったので、今回の機会にできるだけ授業参観を行った。

学部長からもお話があったとおり、「導入演習」はシラバスも共通で、「アカデミック・スキルズ」という共通テキストを利用して実施している。主にはジェネラルなスキル、ということで「レポートの書き方」「発表の仕方」などを学ぶことになっているが、実際は担当教員に任されている部分も多いので、実際、授業参観をしてみてわかったのは、ジェネラルなスキルを伝えることを重視している展開方法と担当教員の専門によった授業展開とその展開方法がさまざまであったが、どちらのタイプでもアカデミック・スキルを身に付けさせる工夫がされていた。ただし、2年生以上になったときに、「導入演習」での学びが身に着いていないことを感じることも多いので、学部として「導入演習」をどのように実施するのかは課題であると認識している。

また、高校の段階で訓練がつまれてくる学生もいれば、そうでない学生もいる中で、私自身もどのように「導入演習」で学生に学びをさせるかは課題であると本日のお話をうかがって感じた。

### 3. 音楽学部

音楽学部教務主任 星野 聡

音楽学部なので、音楽の基礎力をあげることを第一に初年次教育を行っている。音楽の基礎力とは、まずは「楽譜を読むこと」、「楽譜を読んで、それをピアノやそのほかに表現すること」。

ピアノは総合力。ピアノを基本に基礎力を身に付けさせる。本学の音楽学部は音楽芸術学科と演奏学科の2学科があり、演奏学科の学生は高校のときに「楽典」を勉強して入学してくるが、音楽芸術学科は特に音楽の基礎学力は問わず入学してくるので、基礎力を着実に身に付けさせることが必要となる。そのため、レベル別のクラス編成にするなどして対応をしている。音楽芸術学科については、音楽の基礎力を身につけることで「演奏する」のではなく、そのちからを利用して「メディア」やそのほか、社会に出て役立てることをしていくことが学びの先にある。

そのため、とにかく基礎を個々のレベルにあわせて簡単になるべくわかりやすく基礎力を身に付けさせる、ということを音楽学部における初年次教育として行っている。

### 質疑応答

Q	A
竹内教務部長 アクティブ・ラーニングが苦手な生徒たちをどのように巻き込んで行っているか	英語はほぼアクティブ・ラーニングであるが、その他の科目では年に1回ほどの実施。東京女子学園に入学してくる生徒は静かにしていきたい生徒が多いので、どちらかというとアクティブ・ラーニングが苦手な生徒が多い。中学時代に不登校であった生徒も多い。ただ、不登校の生徒には家で読書をしていたりする生徒が多く、賢く論理的に考えられる生徒も多く、発表ができるようになると素晴らしい発表をしたりする。 授業内ではグループをつくるときに4人グループにして、特異な生徒と苦手な生徒をまずは一緒にして経験させる工夫をしている。 他校の教員から聞いた事例では、なるべく大人数の

	グループ編成を行い、発表するときは手をつながせて発表させるとうまくいくような事例もあると聞いている。
梅崎教授 親の立場として。父親の関わりについて。	高校3年生の進路相談のときに、お父さんがよく出てくる。母親は子供を応援するが、父親は地方への進学などに反対したりする。 親の飲み会の会をつくっていて、そういう場でお父さんたちに、子供の進路の幅を狭めないようにとお願ひしたりしている。
梅崎教授 アメリカの歴史を教えている、授業内で前はスライドを配布せず、ノートをとらせていたが、最近、スライドを写メする学生が出てきた。 結果、穴埋めのプリントを作って配布するようになった。思考 感想文からレポートへのステップがなかなかできず苦勞する。 高校で感想から論理的思考に脱皮するのはどういうところであるか。	「感想は100点満点で5点。残りは論理的な考察でなければならず、そうでないと点数はとれない。」と伝えて教育している。ただ、中学時代はほぼ感想、というのが実態。高校生になり小論文の練習を始めると少しずつ変わってくる。 穴埋めのプリントであれば、論理的な内容で穴埋めを作り、感想は別に書かせるようにする。 高校2年生以降、小論文のコンテストなどに応募させるようにすると、書く気持ちがある生徒は伸びる。 論理的思考を発表する場が今までなかったのも、そういう訓練ができていなかった。ただ、そういう場を設けると授業の進みが遅くなり妨げになる。 その点がアメリカと異なるところ。アメリカは小さなときから日常的に論理的思考でのコミュニケーションがされている。 そのため、日本でも小さなころから家庭の中でもそのような教育を行う必要があるのでは。 板書の写メは全校生徒に禁止している。

## FD 講演会を終えて

2016年度は「高大接続」という観点から、早稲田大学の沖清豪教授をお招きして「高大接続システム改革」について学びました。2017年度は、同じく「高大接続」の観点で、今回は実際に高校生たちがどのような学びの経験を経て大学への入学してくるのか、という部分を学ぶ場を持ちました。

高等学校において現在展開されているアクティブ・ラーニングをはじめとした教育により身に着くちからを着実に身に着けて、学生が入学してくれば、その前提を受けて大学における導入教育を行っていく、というのが理想ではあるが、実態としては「文章が書けない」「発表ができない」という個々によって状況がさまざまであるため難しい面があることを改めて認識しました。

また、今の高校生がどのような教育を受けて入学してくるのか、ということを知る良いきっかけとなりました。今後、大学としてどのような入試で受入れ、先につなげていくか、という点を考えて、高校との接続という点に留意しつつ教育の展開をしていく必要性を感じた講演会となりました。

大学FD委員会副委員長  
教務部長 竹内 正彦



## 講演会の様子

### 基調講演



### 第2部



### 質疑応答







本事業に伴い、「プロジェクト・チーム」と「IR 専門委員会」を新しく立ち上げて PDCA のサイクルの仕組みを構築することとした。

## 2. 事業実施に至る背景・経緯

本事業を実施するに至る背景としては必然的要素と偶然的要素が重なりあって、AP 事業に応募することになった。具体的には下記のとおり。

- ①教育の質保証への要請
  - ②成績評価（GPA）の標準化（正課教育の学修成果の可視化）の問題
  - ③キリスト教主義に基づくリベラル・アーツ教育による学修成果の把握
  - ④AP 開始以前から、2018 年の創立 100 周年に向けた学科再編を検討
  - ⑤AP の公募開始とほぼ同時期に、本学の「グランドビジョン」を策定
- ①～③：必然的要素、④⑤：偶然的要素

⑤にある「グランドビジョン」の策定とともに、「大学として育成する人物像」も定めた。この人物像に基づきどのような教育を実施していくかについても書き出す作業を行った。

### 【大学として育成する人物像及び実現のための教育】

1. 知力（知識）を行動力にするリーディングウーマン
  - 問題解決型教育の展開（PBL の導入）
  - 論理的思考に基づく判断力・決断力・実行力の育成
  - 他者を尊重し協働できる女性の育成
  - 多文化共生社会への理解を深める教育
  - 異なる考えや意見を受け入れる力を育成する教育
  
2. 国際的な視野をもった地球市民としての女性
  - グローバルビジョン育成のための教育の推進
  - 英語教育の強化  
(キャリア・イングリッシュ・アイランド事業等の強化)
  - 英語による授業の展開
  - 留学・海外体験の促進
  - 国際的視野を育む教育環境の整備
  
3. 専門性と幅広い教養をもった女性
  - 本学独自のリベラル・アーツ教育の一層の推進
  - 体系的・順次性をもった専門教育の推進
  - 幅広い視点から考える力を養う全学共通カリキュラムの充実
  - 文理融合型の教育の展開
  - 専門教育の充実による高度な専門的職業人および 研究者の育成
  
4. キャリアをカスタマイズする女性
  - 生涯にわたって主体的に学び続け自らキャリアを構築する女性
  - 正課教育と正課外教育の連携によるキャリア教育の充実
  - 一人ひとりの生涯にわたるキャリア構築支援
  - 一人ひとりの個性に合ったキャリア支援の充実
  
5. 21 世紀の高度情報化社会に対応できる女性

- 高度の ICT リテラシーを身につける教育
- データ・証拠に基づく理解・課題解決能力の育成

「育成する学生像」は 2008 年度から実施していた独自の学修行動調査の結果から、東京女子大学の資質・傾向が見えてきており、その他、弱点なども見えてきており、それらを踏まえて明文化したものである。

### 3. 構想から実現までのプロセス

合意形成のプロセスは次のとおり。

- 学長室会（毎週金曜日）で検討
- 教育研究開発委員会に提案、応募することを決定
- 学長、学部長、学部長補佐を中心に、事業の青写真を作成
- その青写真を基にして、学部長補佐、教務委員長、学務課長を中心に、事業の詳細を策定
- 教育研究開発委員会、将来計画推進委員会での検討を経て、「リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデル構築による学修成果の向上と可視化」で同事業に応募することを教授会、大学評議会、理事会で報告

今回の事業を計画するにあたり、「ポートフォリオの実施」が最後まで検討課題であった。最終的には、学生と教員の負担を考慮し導入をしないこととした。

AP 事業は採択にあたり、補助事業終了後も継続可能かどうか要件であったため、予算確保のためにも理事会の承認を得ておくことが必要であった。

### 4. 現時点での成果と課題

#### 【成果】エビデンスに基づいた教育改善の実施

各調査の結果から見えてきたこと（下記参照）に基づいて、2018 年度からの学科再編に伴うカリキュラム改革を行った。その他、AP 事業に採択されたことにより IR 機能の充実や大学改革推進課の設置など、ハード面及びソフト面の充実したことも成果といえる。

- 学修行動調査から見えてきたこと
  - ① 「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成するスキル」
  - ② 「相手に伝わるような論理的な構成のプレゼンテーションを行う技術」
  - ③ 「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をするスキル」
  - ④ 「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べるスキル」
  - ⑤ 「他者と積極的に意見を交換しながら、活発なディスカッションを行う能力」
  - ⑥ 「パソコンで図表を作成するスキル」
  - ⑦ 「数字やデータに基づいて物事を考える力」
  - ⑧ 「率先してグループをまとめリードする力」
- 企業調査から見えてきたこと
  - ⑨ 「問題解決力」
  - ⑩ 「ビジネス場面に対応できる英語力がある」
  - ⑪ 「効果的なプレゼンテーションができる」
- 卒業生調査から見えてきたこと
  - ⑫ 「対自己基礎力」
  - ⑬ 「図表からの的確にその内容を読み取れる」
  - ⑭ 「ビジネス場面に対応できる英語力がある」
  - ⑮ 「効果的なプレゼンテーションができる」



・PROG テストから見えてきたこと

- ⑯ リテラシー（情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力）については、他の私立大学の平均値を大きく上回る。
- ⑰ コンピテンシー（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）については、統率力、感情制御力、自信創出力、行動持続力、計画立案力が、他の私立大学の平均値と同じか、もしくは少し下回る。

**【課題】**

課題としては、「学生のアンケート、テスト疲れ」「学生へのフィードバック」「ベンチマークの策定」「本事業の持続可能性」などが挙げられる。

学生に対し AP 事業の意義が伝わっていないなかでのアンケートやテストの実施が学生の負担となっている。補助期間終了後には縮小する方針。また、「学生へのフィードバック」ができていないことも課題である。「TOFEL」については結果を学生へ戻してはいるが、これだけでは不足していると感じており、より効果的なフィードバックの方法を今後検討しなければならない。

「ベンチマークの策定」については、学生たちがもっている資質の強み、弱みは調査結果から浮かび上がってくるが、その点について伸びた、下がったということを見る際の基準が必要であるが、「態度・志向」についてはそもそも基準を設けてよいのか、という点が大きな議論となる部分である。

最後に事業の持続可能性については、予算の面だけでなくマンパワーとしても持続性については大きな課題がある。人がかわっても継続できるシステムの構築が必要である。

**質疑応答**

Q	A
谷教授 カリキュラム改訂の際に、閉じた科目群があるか	ある。 コマの観点からも閉じる必要があった。 内容的に重なりのある科目、履修者数が少ない演習科目などを整理した。
谷教授 学生に幅広い知性、一般的教養がない、ということが教員間で話題になるが、そのような結果が調査結果から浮かび上がらないのは、教員側にその必要性がない、学生にとっても必要性がないと認識されているのか。	アンケートの結果からは弱い部分として出てこない。ただし、現実的にどうかという部分ではわからない。全体的な傾向は明確には見えない。
谷教授 調査結果から見えてくることと、東京女子大学の教職員が漠然と抱いてきた学生像と一致するか。	AP 事業に関わっている教員としては一致するものがあつた。
谷教授 学生へのフィードバックをしたときに、学生にとっては自分と違うと感ずることがあると思う。実際にフィードバックを行っている大学の事例や先生のお考えがあれば教えていただきたい。フィードバックにどのような反応があると想定されるか。	PROG フィードバックの場に出てこない、という問題もある。学生の反応についてもあまりすぐに出てこない。そういう点でもフィードバックが足りていないと思ひ、
荒井教授 「卒業論文」「卒業研究」のルーブリックについて、各学科別に作成したのか。また、どのようなルーブリックを作成されたか。	1 学部 4 学科 12 専攻があり、専攻ごとにルーブリックを作成した。ただし、そのうち 1・2 項目については学科で共通するものをいれるように教務委員会から要請した。 6つの観点と 5段階の尺度のマトリックス型のルー

	ブリックを作成した。
荒井教授 先行研究をちゃんと抑えているかについても尺度として設けられているか。	はい。 専攻によって、内容の詳細さには差がある。まだ、その統一には至っていないが、発展途上。まずはやってみる、という段階で今後
荒井教授 先生方のルーブリックへの反応	冷たい。ただし、成績問合せの際には、教員は学生に対しルーブリックを用いて説明をしているので、活用はされている。

## FD 講演会を終えて

大学 FD 委員会副委員長  
教務部長 竹内 正彦

2016年度のFD活動のひとつとして「他大学の学修成果の把握状況」を各大学がホームページで公表している範囲内で調べ、その事例を各学部のFD勉強会で共有する場を持ちました。このことも踏まえ、2017年度はより具体的に「学修成果の把握」の方法について学ぶことを目的とし、本学と同規模のキリスト教主義の女子大学である東京女子大学から樋脇教授を招いて講演会を実施することとしました。

ご講演を通して、各調査の結果をエビデンスとして、カリキュラム改革を実施した点が東京女子大学の素晴らしい点であり、本学においても今後、カリキュラム改革を行う際の視点として学ぶ点が大きかった点です。

なお、今回のご講演をきっかけにALCS学修行動調査に2018年度から参加することを決めました。

## 講演会の様子

### 基調講演



### 質疑応答



2-3

### 第3回FD講演会 PBL 科目の実践と課題

#### 講演会チラシ

日時:2018年2月28日(水)17:00~18:30

会場:緑園キャンパス 2303 教室

プログラム

第1部 基調講演

昭和女子大学における PBL 実践と課題

第2部 質疑応答

講師:小森 亜紀子(昭和女子大学グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科専任講師・現代ビジネス研究所事務局長)

司会:竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学科教授)

対象者:専任教職員

出席者:学長、教務部長、教員 12 名(英文 2、日文 1、コミュ 0、国際 4、音楽 3、演奏 1、情セ 1)

職員 20 名

2017年度第3回フェリス女学院大学FD講演会

### PBL科目の実践と課題

【日 程】2月28日(水) 【会場】CLA棟2303教室  
 【対象者】本学専任・嘱託教職員  
 【プログラム】  
 17:00~ 挨拶・講師紹介  
 17:10~ 講演 18:10~ 質疑応答  
 18:30~ 情報交換会(18:00終了予定)

「PBL科目を実践している、良かったから予想して、4月卒業生の方にぜひ伝えてほしいです!」

●講師紹介●  
 小森 亜紀子 先生  
 昭和女子大学グローバルビジネス学部 ビジネスデザイン学科専任講師  
 現代ビジネス研究所研究開発部長  
 同女性文化研究所所員  
 同社会人メンターネットワーク運営委員  
 同グローバルキャリア開発推進委員

昭和女子大学文学部卒。2005年昭和女子大学大学院生活情報研究科に社会人入学として入学。2007年修士課程修了。2010年専攻後期課程修了。2011年専攻前期課程修了。2011年~2012年、昭和女子大学キャリア支援センター勤務。昭和女子大学社会人センター制度創設事務局を創設。2012年度より、現代ビジネス研究所所員、女性文化研究所所員。2017年度よりグローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科所員。現在の所属内には「プロジェクトマネジメント」(女性のキャリア形成)、「PBL (Project Based Learning) の効果測定」等、ダイバーシティ推進機構創設プロジェクトにも参加。2012年度より「ゆきまのほろろ」(コアファクター)「彼女達」(新編アメリマーケット)「Dooワークショップ」(原主電映)等PBLを推進。

当日はこんなお話を伺う予定です!

- ①連携先の確立方法
- ②連携先の課題解決に「つがひ、かつ、建学の精神」
- ③各学科の専門分野に即する課題の設定方法
- ④授業設計の留意点
- ⑤連携方法、到達目標や成績評価の設定方法、成果の発表方法等
- ⑥学生自身の振り返りの仕組み ⑦学修成果の評価・特定方法
- ⑧大学広報への活かし方 ⑨その他課題 ...etc.

#### 基調講演

2012年度にグローバルビジネス学部の設立とともに設立された現代ビジネス研究所に教員として所属し、2015年度からは現代ビジネス研究所の事務局長も兼ねることになった。その他、昭和デザインオフィス(インターンシップ型PBL統括部書)及び地域連携センターの所員でもあり、それぞれでPBLに携わっている。

#### 1. 昭和女子大学のPBL教育

##### (1) 昭和女子大学でのPBL

昭和女子大学ではPBL活動を「実社会での課題解決を企業・地域等と産学連携というかたちで解決するプロジェクト研究活動」と定義しており、2017年度では110を超えるプロジェクトが走っている。

プロジェクトは教員主導型、または現代ビジネス研究所に登録している研究員主導の2種類があり、現在ビジネス研究所でそれらを統括している。

また、グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科では、3年次生からゼミでPBLに携わるカリキュラムになっている。

その他、特色のある取り組みとして「キャリアママ・インターンシップ・プロジェクト」がある。附属小学校の生徒のためのアフタースクール（学童）から、生徒を自宅まで送り届け、保護者が帰宅するまで生徒の面倒を見るというプロジェクトを行っている。附属小学校の保護者と共同したプロジェクトであり、目的としては、「仕事と子育て」が一番の将来の不安である今の女子学生たちに、リアルに「仕事と子育て」の両立の現場を体験させ、実際に「仕事と子育て」を両立しているご両親の様子を見せることで、将来の不安をなくし具体的に将来の自分像を想像できるようにさせるためとして始めた。

### <展開されている PBL 事例>



**昭和女子大学×資生堂共創プロジェクト**  
 〈資生堂ジャパン株式会社〉  
 担当：小川睦美・高木俊雄・小森亜紀子



**ゆうきのつばさ inclusion FES.2016**  
 〈ゆうきのつばさinclusionFES.2016実行委員会、他〉  
 担当：小森亜紀子



**フロアホッケー昭和女子大学せたがやウッキーズ**  
 〈世田谷区子ども・若者部若者支援担当課〉  
 担当：渡辺剛、小森亜紀子



**渋谷センター街七タまつり**  
 〈渋谷センター商店街振興組合〉  
 担当：友田



**カンドゥージャパン リピーター増加企画プロジェクト**  
 〈株式会社 カンドゥージャパン〉  
 担当：船橋



**三茶さんちを楽しもう！プロジェクト**  
 〈三軒茶屋銀座商店街振興組合他〉  
 担当：瀬沼



**手をつなごう！下馬福祉工房&福祉社会学科コラボカフェ**  
 〈世田谷区立下馬福祉工房（指定就労移行支援、就労継続支援B型事業所）〉  
 担当：渡辺剛、伊藤純、森ます美、若林功



**せたがやウッキークラブ創立10周年記念イベント**  
 〈〔協働〕せたがやウッキークラブ（協力）ハーモニージャパン株式会社、近畿日本ツーリスト株式会社（協働）せたがやウッキークラブ（協力）ハーモニージャパン株式会社、近畿日本ツーリスト株式会社〉 担当：渡辺、横山



**コラーゲン美容市場リバイタライゼーションプロジェクト2015（仮題）**  
 〈新田セラチン株式会社〉  
 担当：奥袋



**ホンノバ・プロジェクト「春、ホンノバ・カタリバ」**  
 〈NPO @リアス、NPOこれからの建築を考える（伊東建築塾）〉  
 担当：杉浦



**株式会社JALカード Navi 入会促進企画プロジェクト**  
 〈株式会社JALカード、日本航空株式会社 路線総務本部マイレージ事業部〉  
 担当：船橋



**ユニバーサルマナー 2020プロジェクト**  
 〈株式会社ミライロ〉  
 担当：船橋

## (2) PBL の前提となるキャリアデザイン・ポリシー

昭和女子大学では、次のとおりキャリアデザイン・ポリシーを定めている。

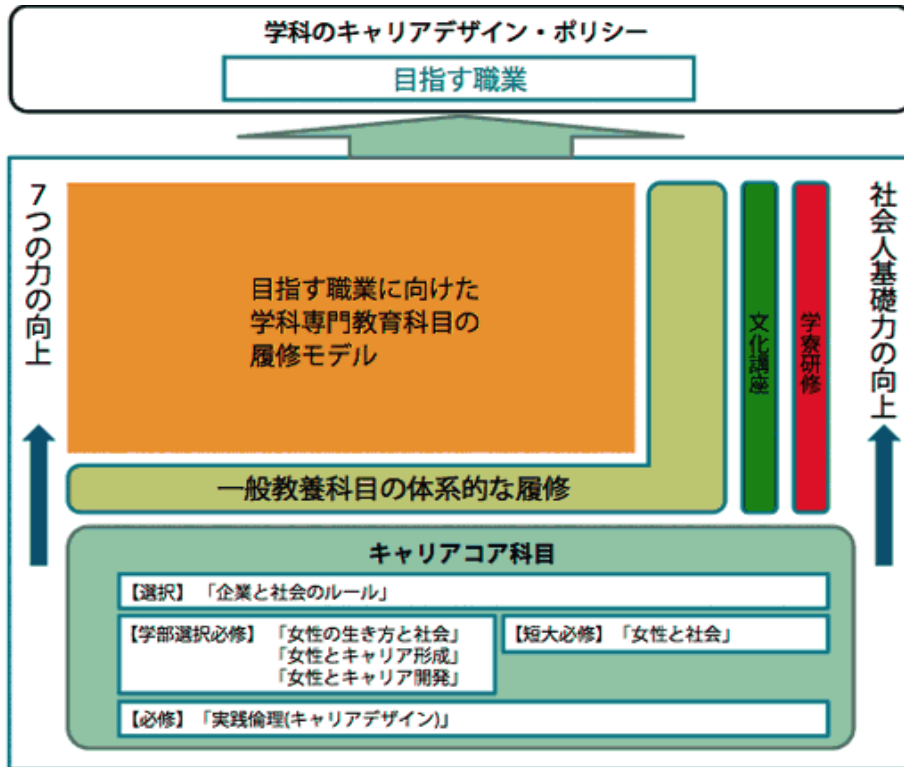
- ① 本学での学修と実践を通して、継続就業や再就業に係る職業意識・職業観を磨き、長い生涯にわたる自分の生き方を設計するキャリアデザイン力を養う。
- ② 学科の「キャリアデザイン・ポリシー」に基づき、「専門教育科目」を体系的に履修することによって、その特性を活かした職業・就業分野で社会的に自立する職業人を育成する。
- ③ 国際的な視野と豊かな教養、職業上の倫理観を身につけ、自立した人間として 21 世紀の男女共同参画社会を担う人材を育成する。

## (3) 昭和女子大学のキャリア教育・キャリア支援

昭和女子大学のキャリア教育・キャリア支援の目標は次のとおり定め、キャリア教育と支援に力を入れている。キャリア支援センターにはキャリアカウンセラーを含む 20 名のスタッフがおり、面談も多く実施しインターンシップも推奨している。就職率は毎年度、全国平均より高い水準を維持している。



- 1年次：就業の意義・キャリアデザインの重要性を学ぶ
- 2年次：ビジネスフィールドを知り、ロールモデルに学び、自己のキャリアデザインを描く
- 3年次：就活スキルを磨き、内定獲得に向けて行動する
- 4年次：卒業との進路を確定し、目標を持って社会に巣立つ



ビジネスデザイン学科のキャリアデザイン・ポリシーには「PBL」が組み込まれている。



## ビジネスデザイン学科

### キャリアデザイン・ポリシー

1. ビジネスや社会の場において、ビジョンと洞察力を持ち、組織の中核となって活躍できる人材を育成する。
2. 課題を自ら設定し、解決できる能力を活かして、企画を立案し、組織を運営できる人材を育成する。
3. 広い視野を持ち、英語力を活かして、グローバルな経済社会で情報発信できる人材を育成する。
4. 経営に必要な資源や能力を活かし、使いこなして、民間企業およびコミュニティビジネス、NPO（非営利団体）、公共部門などにおいても活躍できる人材を育成する。

#### ■ビジネスキャリアの形成に向けた学科教育プログラム

グローバルで多様な視点を持ち、考え行動するビジネスパーソン



#### 2. 連携先の確立方法

連携先の確立方法としては主に次の4点となる。最近④の大学ホームページを見ての依頼も増えてきている。

##### ①教員個人のネットワークから

資生堂/沖縄ファミリーマート/BMW/ケンタッキー・フライド・チキン

##### ②理事長室・学長室・キャリア支援センター等、学内部署から

城南信用金庫/下着メーカー/外資系ブランド/世田谷区/神奈川県大井町他

##### ③現代ビジネス研究所研究員から

Cookpad/福島いわき温泉他

##### ④大学HPを見て

早川書房/徳島県海陽町/SVOLME 他

#### 3. 課題の設定方法

課題の設定について次のことに留意している。

①PBLの形態により異なるが、協働先との摺合せで決めていく。

②協働先のスタンスにより異なるが、教育であることを理解いただく。

③建学の精神にそぐわないものはお断りすることもある。

④各学科の専門分野に特化した内容のPBLもあるが、他学科・他学年と協働することによる効果もあるので、できるだけ全学公募をするようにしている。

⑤PBL担当教員により関わり方は異なるが、課題は常に見直し、軌道修正ができるようにしている。

#### 4. PBL設計の留意点

##### ①協働先とのPBL連携方法

(1) 資生堂

1年目は1か月にひとつの課題が与えられ、1か月に1回、資生堂とミーティングを進めていく形式。2年目前期は学生のみで企画、資生堂へのプレゼンし、後期は2か月に1回

(2) 沖縄ファミリーマート

おにぎりとパスタ、スイーツの商品開発 PBL。夏休みに学生が沖縄の離島を訪ね、商品開発の検討を行った。

(3) BMW

本社（ドイツ）からデザイナーが来訪し、ショールームに訪れるお客様へのプレゼント「レッグウォーマー」の開発 PBL とバイクのラッピング開発 PBL。

(4) ドンキホーテ

コンペ方式でのプロジェクト。「ドンキホーテで購入するのであればどんな商品を買うか」を学内公募。上位5位について商品化。

②到達目標設定

PBLにより大きく異なる。商品開発などははっきりしていてわかりやすいが、目標がはっきりしていないものは担当教員も企業側も苦勞する。

③成績評価方法

ゼミとして参加している学生は担当教員が活動実績を評価する。インターンシップ型は単位付与のみ。全学公募 PBL については単位付与もなく評価もない。ただし、全学公募 PBL へは多くの学生が応募してくる。全学公募 PBL への参加学生の選定は応募動機内容及びゼミ担当教員等からの評価を経て行っている。また、企業によっては面接を行うこともある。

④成果の発表方法

プロジェクト研究発表会を全体、または PBL 単位で実施。

5. 学生自身の振り返りの仕組みと方法

①プロジェクト参加事前事後アンケート実施

②協働先への報告書の提出

報告書は学生が作成する。沖縄ファミリーマートプロジェクトでは、開発した「おにぎり」「パスタ」「スイーツ」それぞれの部門で報告書を作成していた。

③協働先、または大学での報告会の実施

広報部からプレスリリースを行うこともある。

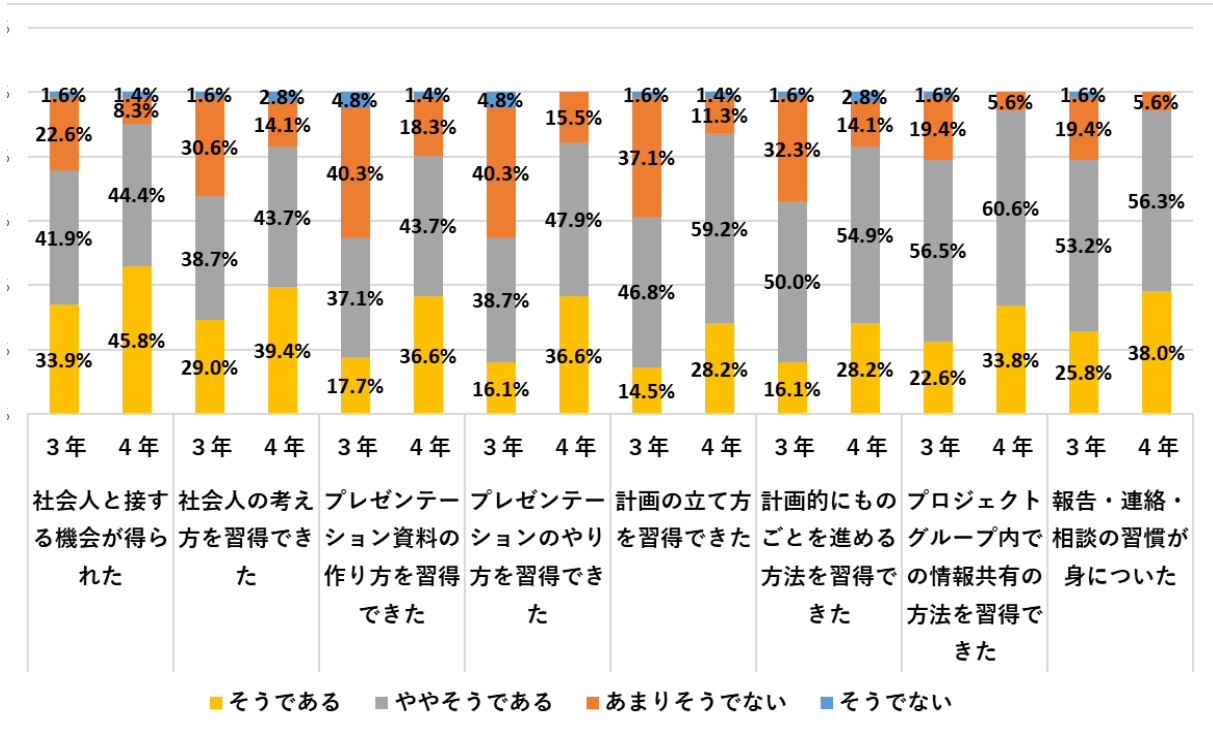
6. 学修成果の評価・測定方法

①PBL 参加事前事後学生アンケートのデータは蓄積しているが、公開するにはデリケートな部分があり、学内資料として使用している。

②ビジネスデザイン学科の学生については、キャリアデザイン・ポリシーに PBL が組み込まれているので、経年で自己評価アンケートを実施している。

アンケート結果から4年次 PBL 参加の有無と将来前向き度得点の関係を見ると、PBL 参加経験者、それも公募プロジェクトに参加をする学生の将来前向き度が高い。正課学習積極度得点も、公募プロジェクト参加群>必修プロジェクト参加群>不参加群の順となっていることがわかった。

【自己評価アンケート結果：ビジネスデザイン学科1期生（2016年度卒）PBLで身についたこと】



③昨年度からは限定的ではあるが PROG も取り入れ、IR データとして使用している。

7. 大学広報への活かし方

協働先との協定により、広報の仕方が異なり、また、企業の場合は事前確認が必須である。内容としては次のとおり。

ホームページでPBLの取り組みを見て、PBLをやりたいと昭和女子大学に入学した、という学生もいたりする。学外からの取材も多く、結果的に広報につながっている。

- ①プレスリリース・記者発表会
- ②大学案内やアドミッション関係のリーフレットに掲載
- ③オープンキャンパスでポスター発表
- ④大学HP・公式Facebook・学科ブログでの発信
- ⑤プロジェクトごとにS-LABO、Facebook、twitter、Instagramで情報拡散

8. 今後の課題

今後の課題としては次のとおり挙げられる。

- ①PBLを実施している学科に偏りがあるため、全学公募型を増やす方向を検討している。
- ②担当教員の負担が大きい、評価に反映できれば良いと考えているが上長によって異なるため、難しい部分である。
- ③サポートする事務体制の見直しを来年度から実施予定である。
- ④フリーライドする学生への対応として、途中でPBLメンバーから外すことも必要となってくる。
- ⑤外部資金導入のあるPBLとそれ以外で、学生の交通費自己負担等が異なる。学生の負担を軽減できるよう、できる限り外部資金導入を目指している。
- ⑥成果の検証をどう継続して、PDCAにつなげるかについて学科IRの観点から検証していく。

質疑応答

Q	A
<p>谷教授 企業側のメリット。企業にどのような利益をもたらしていると考えていらっしゃるか。</p>	<p>WinWin にならないと PBL はつながらない。企業側のメリットについて、学生の前では話さないが、教員と企業との間でかなりはっきりと話す。企業にとっての「メリット」を的確に示してもらうようにしている。</p>
<p>谷教授 今後、大学教育や日本社会のなかで PBL というスタイルがどのように広がっていくと考えていらっしゃるか。</p>	<p>確実に今後増えていくと感じている。立教大学や早稲田大学で「リーダーシップ・プログラム」(イノベスタが提案しているもの) は学生自身が PBL を行うものを行っている。今後、この形式は確実に広がっていくと感じている。</p>
<p>谷教授 ビジネス・マナーやメールの送り方等の学生への教育対応について</p>	<p>ビジネスデザイン学科では、1年生の基礎ゼミで教育をしているが、担当教員として、個々のメール等へ細かく指導している。メール送信の時間帯やメールの署名、ミーティングの議事録の書き方等、すべてについて都度指導している。</p>
<p>荒井教授 教員からの PBL が多いように見受けられるが、形態別のプロジェクト数の違いについて</p>	<p>教員が自発的に行いたい PBL も必ず大学に実施することについて認定を受けなければならない。ゼミのみで行うプロジェクト、ゼミ+公募のプロジェクト、公募型プロジェクトの形式がある、公募型プロジェクトの方が圧倒的に数が多い。</p>
<p>荒井教授 必修プロジェクトについて</p>	<p>学科のカリキュラム・ポリシーには PBL が入っているが、ゼミによって PBL ではなく実際の活動ではなく、「事業計画書を書く」というかたちで実施する教員もいる。PBL 活動を実施するゼミに所属した場合は、PBL 活動に参加することが必須。</p>
<p>荒井教授 公募型 PBL の実施期間は教員が決定できるのか</p>	<p>教員が自由に決められる。ただし、ゼミの場合は、</p>
<p>荒井教授 企業からの提案を断る際の断り方</p>	<p>学生に教育効果がある、と思われないプロジェクトの場合はお断りしている。PBL 活動を所管している運営委員会において審議、学長ミーティングへの</p>
<p>荒井教授 学生への交通費の至急について</p>	<p>協働先が提供してくれた場合は、学生に交通費を出す。提供がない場合は交通費は学生負担。自費の場合は</p>
<p>大谷教務課長 学生の選考基準はどうなっているか。事前にオープンにしているか。</p>	<p>事前にオープンにしている場合としていない場合がある。複数教員(3名以上)で選考を行う。日本語と英語のエッセイを提出させ選考することもある。ひとりの教員の好き嫌いで選考されないように注意しており、選考者と方法、その結果については運営委員会に報告している。</p>

秋岡学長  
PROGからのIRデータ化について、アドミッションに結び付けたりなどを考えていらっしゃるか

アドミッションには利用することを決めている。  
GPAだけではわからない部分がPROGによって見えてくる部分がある。

## FD 講演会を終えて

大学FD委員会副委員長  
教務部長 竹内 正彦

ご講演のなかで、小森先生が「PBL活動をしていると学生の成長が手にとるようにわかる。これが、教員にとって一番の喜び。また、正課への姿勢についても影響がある。」とおっしゃっていたことが大変印象的でした。お話をうかがって、実際に学生がPBL活動に取り組むなかで、提案の作成、企業へのプレゼンを通して、学生が多く学びを得ている様子がよくわかりました。

本学でも2018年度からCLAコア科目において、フェリスらしいリーダーを育成する人材養成プログラム「FERRIS+」がいよいよ始まります。「FERRIS+」の学びの核におかれている「プロジェクト演習」を展開するにあたり、大いに参考になりました。

一方、PBL活動を効果的に展開し持続していくには、担当教員の積極的な関わりが欠かせないことが非常にわかりました。今後、本学においてもPBL科目を推進していくにあたりどのように担当教員をサポートしていくことができるか、という点も課題のひとつとして浮かび上がりました。

## 講演会の様子

### 基調講演



### 質疑応答





## 3

## 学修行動調査

2017年度は第5回目となる学修行動調査を実施しました。回答率が低いことが継続しての課題であることを確認しました。

また、今回より、前年度の学修行動調査結果やその他のデータを用いたクロス集計分析を行い、本学の学生の傾向を把握するための試行を始めました。

目的	(1)学修時間の実態や学修行動の把握 (2)学修成果の把握
対象者	学部学生全員
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用
実施期間	2018年2月23日(金)～4月17日(月)
回答率	第5回(後期末) 30.5% (10月1日付在籍者数:2,525名、回答者数:771名) 参考:前年度同時期 31.4% (10月1日付在籍者数:2,546名、回答者数:798名)
設問の概要	(1)大学入学後の時間の使い方 (2)授業での経験 (3)学修への取り組み (4)授業に対する意識 (5)入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6)本学の教育への満足度

## 4-1

## 教育の質向上に向けた取り組みーカリキュラムマップの見直し

中期計画 17-20 PLAN のひとつである「教育の質保証のインフラとしての情報提供」の目的である「定められたカリキュラムのもと、学生が履修を計画し、適切に履修するため。」への取り組みとして、カリキュラムマップの見直しを行いました。

具体的には、2017年度から新たな「三つの方針」を定めたことに伴い、カリキュラムと「ディプロマ・ポリシー」の関係性を学生に示すために、カリキュラムマップ上に「ディプロマ・ポリシー」と科目群の関係性を明記しました。

## 4-2

## 教育の質向上に向けた取り組みーシラバスの改善

中期計画 17-20 PLAN に基づき、定められたカリキュラムのもと、学生が履修を計画し、適切に履修するため、また、組織的なカリキュラムの PDCA サイクルを展開するためのインフラとしての機能をより高めることを目的として、2017年度は、2018年度に向けてシラバスの項目については、大きな変更は行わなかったものの、教員に対するシラバス作成要領の見直しを行い、例年通り科目責任者によるシラバス点検も実施しました。

## 2016年度からの変更点

- ・「テキスト」または「参考資料」のいずれかを記載するよう必須化
- ・「筆記試験」を成績評価方法に含む場合に、授業計画への記載必須化

## 5

### 2017年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
6月5日(月)～6月23日(金)	専任教員による授業参観 (対象:一般教室(中小規模教室)における講義科目)	大学FD委員会
7月5日(水)	第1回FD講演会	大学FD委員会
7月26日(水)	外国語による教授法FDプロジェクト③	大学FD委員会
7月14日(金)～7月28日(金)	前期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
7月14日(金)～7月28日(金)	前期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会
9月24日(土)	Ferris English Teachers' FD Workshop	英語教育運営委員会
11月21日(水)	第2回FD講演会	大学FD委員会
12月1日(金)～1月29日(月)	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
1月16日(火)～1月30日(火)	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会
2月23日(金)～4月17日(月)	第5回学修行動調査	大学FD委員会
2月28日(水)	第3回FD講演会	大学FD委員会
12月～3月	教育の質向上に向けた取り組みーカリキュラム・マップの見直し	大学FD委員会 各学部FD委員会
12月～3月	教育の質向上に向けた取り組みーシラバスの改善	大学FD委員会

以上